

落葉の子守唄

代々木野ねぎ物語

伊東昌輝



の子守唄

代々木野ねぎ物語

伊東昌輝

落葉の子守唄

定価1300円

第1刷発行 昭和60年4月20日

著者 伊東昌輝

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

Printed in Japan

© 1985 伊東昌輝

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-201865-9 (0) (文2)

目次

古武羅の赤いバラ	5
埋蔵金始末記	23
瘋癲麻耶の夢	41
赤袍	73
神さまへの遺言	91
厄どしの女	107
合格祈願	132
大日本蝦蟇教	153
落葉の子守唄	183
コロンボの地鎮祭	209
祭囃子と赤トンボ	258
悪霊祓	273

装帧
小沢良吉

落葉の子守唄

代々木野ねぎ物語

古武羅の赤いバラ

代々木野神社禰宜、犬養六平太は、社務所の書生前川から自殺のお祓いの依頼があったと聞いたとき、正直なところ、

「なんだ、またか」と思った。

依頼主は、近くの朝日荘というアパートで、その永田という人からだという。

「くわしいことは分りませんが、なんでも自殺したのは若い女性だそうです」

熊本出身の前川は、強い九州なまりでこう報告した。

今年はどういうわけか、正月の松飾りが取れるか取れないうちから、神社には自殺のお祓いが多かった。

一月には、アパートで三十五歳になる独身のサラリーマンが首つり自殺をしているのが発見され、アパートの所有者が青くなつて駆けこんできた。なんでも、そのアパートは古くなったので取り壊し、ちかぢか自分の新居を建てる予定にしていたその矢先の出来事で、女房や子供たちが、
「そんな気味の悪いところには、ぜったい住みたくない」

と言いだしたのだという。

「死んだ人に文句は言いたくありませんがね。ちつとはこっちの迷惑も考えてもらわんことには、かないませんわ」

半泣きの態で、彼は六平太に訴えた。

迷惑といえ、もう一つの第二太洋マンシヨンの場合はもっとひどかった。

今年の一月と二月、立て続けて二件の飛び降り自殺があり、その都度、駐車場の屋根を壊されたり、自動車のボンネットや自転車に被害が出ている。金額にすれば相当な額になる筈だが、いずれの場合も、被害者から加害者に対する損害の請求がなされていなかった。

その理由は、可哀そうで、とても金など請求する気になれないということだった。

加害者は両方とも死亡しているから、請求はその遺族に対してなされるわけだが、一月の方は、三十歳になる独身サラリーマンで、母ひとり子ひとりの生活だったため、あとに残った母親が悲しみのあまり半狂乱になってしまい、とても金など請求するどころではなかった。

また、二月の時は、去年の大学受験に失敗して予備校に通っていた少年で、今年の受験の日が近づくにつれて自信がなくなり、マンシヨンのベランダから身を投じたのだった。この少年は、四国の生れで、帰郷に際しては父親に抱かれ、白木の箱に納まって挨拶に来たが、とうとう最後まで、管理人は駐車場の屋根の破損のことを言いだせないでしまった。

不思議なことに、両者ともこのマンシヨンの住人ではなく、また、申し合せたように十四階建のビルの十一階から飛び降りている。

コンピューターやロボットが人間にとつて代わろうとする世の中でも、説明のできない事柄というものには在るもので、何故、このあたりにも沢山あるマンシヨンの中から二人とも、第二太洋マンシヨ

ンを選んだのか、また、何故十一階のベランダを選んだのかということになると、皆目見当がつかなかった。

「死神が招いたとしか考えられませんな」

沈鬱な面持で、管理人は六平太にぼやいたが、たしかに、自殺者の行動というのは、正常な者にとつては理解に苦しむことが多い。

あまり自殺が続くと、マンションの価格は下がるし、住人たちは気味悪がるし、結局、
「人の出入りをもっと厳重にチェックしてもらわなければ困る……」

と、責任を問われるのは管理人で、こういう場合、たいがいノイローゼになったり病気になる。するか、はなはだしい例では、その管理人自身が自殺してしまったなどということもままあるようだ。こうなると、自殺者を気の毒だなどと、同情ばかりもしていられなくなる。

そこで、今年三番目の自殺のお祓いに行くことになった朝日荘だが、白衣に紫の袴、白足袋に白緒の草履といったいつものいでたちで、六平太は神社から歩いて五分ほどのそのアパートを訪ねた。

アパートといっても、朝日荘は第二太平洋マンションのような大きな建物ではなく、小ぢんまりとした木造モルタルの二階建てで、大型車が二台は楽々入るような車庫の上に載っていた。

車庫の右手に細い階段があつて、それを十段ほど登ると細長い十坪ほどの中庭があり、左手に普通の民家風の玄関があつた。六平太は表札に永田嘉子という文字を確認してから案内を乞うた。

通された部屋は四畳半に六畳の二間続きの和室で、四畳半のほうにはびっくりするくらい立派な仏壇があり、花や供物も新鮮で、灯明もあかあかと点されていた。主人はよほど信心深い人のようにだった。

六畳の方には、真中に紫檀の見事なテーブルが置かれており、隅に置かれた家具などもかなり高価

な品物らしかった。入ってくるときは気がつかなかったが、四疊半の仏間の長押には六十恰好の男性と並んでまだ二十歳そこそこの若い男の写真が飾られていた。

表札が女名前だったのは、たぶんこの家の主人と息子に先立たれた未亡人が、心ならずも自分の名前を表に掲げざるをえなかったからだろう。

そういえば、アパートというのも、未亡人が生活費を得るために、ご主人の弔慰金かなにかで庭の角に俄かにこしらえた建物のようなだった。

しかし、部屋の調度類といい、庭の手入れの具合といい、未亡人の生活ぶりにはかなりの余裕が感じられた。

上等のお茶が若いお手伝いさんの手で運ばれ、それから暫くして、永田嘉子が新聞紙にくるんだ櫛の枝を持ってあらわれた。としは五十がらみ、立ち居振舞のきちんとした品のいい女性だ。

「余りよいのがなくて……前もって花屋さんに頼んでおけばよかったのですけれど」

「いえ、これだけあれば充分です」
枝ぶりの良さそうなを選んで、手早く六平太は大麻用の紙垂しでと麻をつけはじめた。手を動かしながら、必要な事柄を質問する。

「自殺なさったのは、若い娘さんだそうですね」

「ええ、十七か八の女の子です」

「こちらのアパートの方ですか」

「いいえ、それがどこの娘なのか、さっぱり分らないんですよ」

嘉子はそつと眉を顰めた。

「朝、起きてみたら、うちの庭に倒れていたんです」

「では、行き倒れですか」

「それが、警察では一応自殺だろうと仰有るんですが、私にはどうも合点がいかなくて」

「どうしてですか」

「なんだかそんな気がするんです」

「では、とにかく現場へ参りましょう」

六平太は装束に着換え、祝詞を懷に、大麻を持って立ち上った。

嘉子が案内してくれた場所は、先程の細長い庭の一角で、一番奥に家庭用の古びたブランコがあり、その手前の敷石のような四角い御影石が置かれているところだった。

「その石のところに頭をのせて……」

かなり離れた所から、こわごわ嘉子は情况进行了説明した。

「まるで、お人形のように倒れていたんです、初めは眠っているのかと思ったくらいでした」

「服装はどんな風でした、パジャマですか」

六平太は、受験ノイローゼの近所の娘かなにかが夜中に家を抜けだして、この庭に迷いこんだところを想像した。第二太平洋マンションの例でも分るように、どうも自殺者というのは、自分の家以外のところに死場所を選ぶものらしい。

「服装は赤いダウンジャケットに紺のジーンズで、赤い運動靴をはいていました」

「それなら、普段よく街で見かける服装ですね」

「ええ」

お手伝いの娘さんが、小さな机に酒、米、塩などの供え物をのせて運んできたので、六平太は、それを倒れていた少女のちょうど足もとあたりに置くよう指示した。

「さっき奥さんは、自殺という警察の見方に合点がいかないとおっしゃいましたが、それはどういう意味ですか」

どんな事でも中途半端にできないのが、六平太の性分だ。死んでいた少女が自殺か他殺かでは、祈念の仕方もあるで違ってくる。榊の枝をただ左右左と振るだけでは、彼の気持がすまなかった。

「自殺でないとすると、他殺ということですか」

「いえ、私もそこまでは考えておりません。昨日も警察の方が見えまして、他殺ではないとはっきりおっしゃいましたし、私が見たかぎりでも血や外傷は全然ありませんでした」

「すると、死因はなんだったんですか」

「腰と腕の辺に強く打った跡と、それになんでも腰椎の骨が折れていたそうです」

六平太の頭に、すぐ第二太洋マンションの二件の投身自殺が浮かんだが、しかし、この朝日荘は二階建だし、附近にはそれらしい高い建物も樹木も見当らなかった。

「どこか別のところで飛び降り自殺を計ったが、死にきれずにここまでやって来たということでしょうかね」

「警察ではたぶんそうだろうということでした」

「でも、誰かが運んできて捨てていったということも考えられますね」

「ああ、そのことでしたら、ほかに足跡がみつからないから不可能だそうです」

やはり警察はその道の専門家だから、なにもかも調べた上で他殺説をしりぞけ、自殺という結論をだしたのだろう。

「最近、この附近には若い人の自殺がかなり多いんですよ」

「親、きょうだいの悲しみというものを考えないのでしょうかね」

夫と子供を相次いで失った嘉子には、子に先立たれた親の気持が他人ごととは思えない様子だった。

「なにしろ受験地獄ですからね」

「でも……」

未亡人はちょっと考えこむ風に口籠った。

「あの子、学生だったのかしら」

「といいますと」

「口紅やマニキュアをつけていましたのよ」

中学生や高校生だって、このごろは化粧をしているのがけっして珍しくはない。代々木野神社にはど近い原宿や、代々木公園に行けばそんな女の子はいくらでもいる。しかし、話があまり長くなりそうなので、六平太はその辺で会話を打ち切り、早速、清め祓いの儀式にとりかかった。

「とにかく、あんな死にかたをした娘ですからね、魂がいつまでもこの辺をうろろしていると困りますから、特に念入りにお祓いしてくださいね」

「分りました」

六平太は、勝手に他人の家の庭へ入りこんで死んだ正体不明の娘に、

（あまり人に迷惑をかけるんじゃないよ、早くご両親のところへお帰り……）

と語りかけるように大麻を振り、祈念詞をよんだ。

祈禱が終ると、未亡人の表情にもようやく明るさがよみがえった。あれからずっと夜眠れなかったのだが、今夜からはきつと熟睡できるだろうと、何度も礼を述べた。そして、女の子が頭をのせていた石は植木屋に捨てさせようと思うが、どうだろうかと六平太に質問した。それに対して彼は、

「もちろん、捨てていただいで結構です。そのために祟りがあるとか、災いがふりかかるなどということとはけっしてありません」

と答えた。

朝日荘を出ると、六平太はふたたび徒歩で帰路についた。風はまだ冷めたいが、陽の光はすでに春めいていた。山手通りを流れる車の中にも、暖房をとめて窓を開けて走っているのがかなり見受けられた。

代々木野神社は、その六号環状線、別名山手通りの沿線にある。全体がこんもりとした森林に囲まれた小高い岡で、境内の一角に約五千年前の縄文時代の住居跡があることで有名だった。

戦前から奇妙な形をした土器の破片が、雨上りなどに散見されることは一部の人に知られていたが、昭和二十五年から本格的な調査が行なわれ、此処が縄文時代早期から中期にいたる貴重な遺跡であることが分った。中でも、完全な形で発見された竪穴住居跡は、その後、国学院大学の樋口清之教授の指導のもとに復原され、日本の古代住居としてバリの考古学界で報告され、世界に紹介された。

開発が進み、公害に汚染されて、年々樹木が少なくなつてゆく東京の神社の中でも、ここは広い境内に鬱蒼と緑が茂り、昔ながらの鎮守の森らしいたたずまいを見せている。

六平太が社務所に着くと、顔見知りの近くの交番の警察官が彼の戻りを待っていた。

宮司の犬養鉄平は旅行中で、権禰宜の木村幹夫は神社庁にでかけていていずれも留守だった。書生の前川が、不器用な手つきで紙垂を切っていた。

「先日の暴走族の件ですがね」

松崎巡查部長は早速用件を切りだした。彼は五、六年前からこのあたりを受持っている中年の警官だ。いかつい顔をしていてめったに笑ったことのない男だが、誠実さのために住民からは信頼されて

いた。

「被害届けを出してもらいたいと思ってね」

「そんな届けを出したって、べつに損害を補償してくれるわけじゃないでしょう」

「しかし、一応は届けを出しておいてくださいよ」

用意してきた書類を、六平太に手渡した。

「警察でも特別対策本部を設けて、取締りを強化しているところですから、協力してください」

被害届けというのは、一週間ほど前のこと、ある暴走族のグループがこの神社の境内に入りこんできて、処かまわすペンキで自分たちのグループ名を落書きして行ったのだ。さいわい御本殿に被害はなかったが、御末社の裏の壁面には赤いペンキで古武羅と下手くそなぐり書きがしてあった。

他に、石垣や外燈などにも被害があったが、このほうは割合簡単に消すことができたのに、御末社の木部の部分の落書きはペンキが中にしみこんで、もはやどうすることもできなかった。

古武羅というのは毒蛇のコブラのつもりだろうが、松崎の説明によると、このグループは東京郊外の学生と若い工員などで構成されているという。

いつも二、三十台のバイクの隊列を組んで、甲州街道を東に新宿方面へ向い、六号環状線を右折して渋谷から目黒、品川方向へ突っ走るのが彼等のお定まりのコースだった。

たいがい土曜日の夜遅く、交通量の減った道路をけたたましい警笛とすさまじい爆音を轟かせて疾走して行く。それはまるで一陣のつむじ風とも、山の斜面を崩れ落ちる土石流とも思えるほどのすさまじさだった。

広い境内のおかげで、普段は山手通りの車の騒音とはほとんど無縁の六平太も、この連中が通るときには、例外なく安らかな眠りを破られた。森に囲まれた六平太のところでさえもそうなのだから、

まして沿道の住民の迷惑は推して知るべしである。

しかし、騒音だけならまだ我慢しようが、都内には暴走族グループが古武羅^{コアラ}のほかにもいくつかあって、それらが互いに反目し合い、抗争をくりかえしている。代々木野神社での落書き事件も、じつはその抗争の煽りであって、犬が立小便をするように、要するに自分たちのテリトリーを他のグループに対して誇示するためらしいのだ。彼等はそれで満足なのだろうが、やられるほうはたまったものではない。

「あいつら、結局は欲求不満の塊なんですよ」

三人の子持ちだという松崎巡査部長は、どうしようもないというふうに首を振ってみせた。

「駄々っ子みたいなもんでね、あれは」

「ちょっと松崎さん、うちのお宮がやられたから言うわけじゃないが、警察がそんな弱気じゃどうしようもないね、そんな甘い考えだから連中がつけ上るんですよ」

「取締りは厳重にやっていきますよ」

「いや、まだまだ手ぬるいですよ」

「そうですかね」

「そうですよ」

六平太は、最近彼が扱った若者たちの自殺の例を話した。

「死者を悪く言うつもりはないが、しかし第二太平洋マンションの少年にしても朝日荘の少女にしても他人に迷惑をかけるのをなんとも思っていないのは、暴走族の連中と同じですよ。要するにどちらも精神的に未成熟で甘ったれてるんだね。こういう連中を叩き直すのも、やはり社会というか、大人たちの義務だと思うんだけどね」